



ル 4
469
2



門 凡 6
號 4692
卷 2

吉澤
文庫



播磨守所巡覽圖會卷之四目錄

牛堂山園分寺 牛堂 雨山堂 五徳堂 金毘羅 牛場 壇場山
 御神屋 御神 屋 印禪洞 印禪 洞 神明宮 神明 宮
 市川 市川 御靈河 御靈 河 乃过塚跡 乃过 塚跡 姫路城 姫路 城
 惣社大明神 惣社 大明神 神社十六社一宮二宮三宮 神社 十六社 一宮 二宮 三宮 梅雨松 梅雨 松
 内法不 小社辺法 内法 不 小社 辺法 府中深延年中外中 府中 深延 年中 外中 日經時祭礼行列之園 日經 時祭 礼 行 列 之 園
 逢松原 逢松 原 刑部大明神 刑部 大明神 血屋爰 血屋 爰 雄山 雄山 娘治寺 娘治 寺
 月園 月園 上地法 上地 法 日月祠 日月 祠 後園長者宅地 後園 長者 宅地 傾城淵 傾城 淵
 慈恩寺 慈恩 寺 後園長者宅地 後園 長者 宅地 傾城淵 傾城 淵 國府渡 國府 渡
 手枕堂 手枕 堂 國府寺故家 國府 寺 故家 茨田故家 茨田 故家 國府渡 國府 渡
 船場徳本寺 船場 徳本 寺 心光寺 心光 寺 尾田氏石塔 尾田 氏 石塔 國府渡 國府 渡
 雲日明神 雲日 明神 三九湯門渠 三九 湯門 渠 那林塚 那林 塚 齒神 齒神 雲尺橋 雲尺 橋

藏書之印

早稲田大学 図書館
冊 36. 6. 21 購
藏

妙矣明神

本庭 日明神

东山稻荷

宇佐崎惠美酒祠

會松原 妻乃原

松原八幡 大若祠

麻布山

地之持現 麻生神社

于瀨塚

末社八祠 御産石 親向石 枕石 女夫石

暹田井 糸通

八重鉾山

大日ノ森

新羅明神社

妻麻

園府山古城

妻麻三郎墓

黒田氏墓

妻麻川渡

速川祠

飾磨津

日市日川 日掛津

淡天神

飾磨寺遠跡

清水

夷村天満宮

御幸橋

乃辻社

孫三餅

津田細江

日徳蓼

宅倉村

若一皇子權現

長谷山觀音

羽山古坑

巻國

皇田若津

庄山城跡

白國大明神

石室

高松寺

長者屋敷

人見塚

大藏祠

龜舟寺法

老僧岩

石子堂 念佛堂

風蘿堂 義塚

増位山

本堂 禮堂 經堂 拜天文 祿堂 親善堂 古子堂 山王 兩山堂 兩山并 袴樓 政所 柳原墓

弥高峯

廣峯牛臥天王社

三大神 八王子社 白幣社 軍殿 地蔵社 天社 又社 廣王不冠若殿 九郎津元 奥院

御田極津少國

廣峯古城

白幣山

平建寺

甲山神社

玄山八幡

龜山平徳寺

菅編

高峯神社

譽田明神

額田社

泰田祠

手柄山

八荒神社

若居寺遠法

三和大明神

御籠

村楠兵衛神社

御石津

平建里

夏若川

喜山

御舟隈

喜山社

稲園

浅陰澤

秋書淵

妻見園

妻山

稲園社

飾西驛

笠寺薬師

秦氏徳

大蔵社

実法寺

一宮神社

網虫天神

加茂社

天満宮

英賀城跡

白牛

叢寺

大樹清水

書寫山王院馬場

車寄

女人堂

紫雲堂

來迎石

茶所

札納不念佛寺 護王石 枕状

書寫山圓教寺

如長輪觀世音 赤菱母 教如末 阿弥陀堂

天祥 砥石岩 鳥帽子岩

久珠寺 幸田墓 瀧頂水 教如堂 不勒堂 西天護王 奥院 武都墓

坂本城趾

水田城法

揖保

黒園明作

同天祥

竹川

樂々天祥

極樂寺遠次

根本寺

右回寺

楠山石塔趾

橋本清水

柳越山班鳩寺

中多釈迦 兼勝 教者 三層塔 山王社

二王門 弥勒堂 聖靈持祝 昭堂 弱燈松 檀栂山 滝橋 富小川 泰田明祥 跡石 七格

阿宗祥社

班鳩驛

松尾山朝者寺

糸乃舟

小山田高家墓を刈る地

揖保川

云居

八幡宮

令輪山小室

朝日山大日寺

熊見

投石城趾

朝日山大日寺

鶴立山天光寺

林松寺

丁村

陳屋

化糞坂

家清

天幡宮 山王控祝

家清祥社

赤坂清水

家清

院家清 飯盛山 天祥樂 觀音修 丹下清 松清 鞍掛清

相建石

大崎 大崎 加清 小豆清 寺一 長年浦 龍崎 坊勢清

破誓祥社

凡甲炭 土庫岩

稲根

白鳥園

破誓祥社

伴若男墓

法善寺

峯相山鶴足寺趾

云師村

伴若男墓

法善寺

松天照祥社

津屋寮

岩屋城趾

一筋川

大滝村

林田陣屋

祝田祥社

龍眼本

白舟水

夜守柳

丹楓

龍眼本

琵琶山

八幡宮

法岩舟

忘る

松山城法

紫指城趾

新宮陣屋

文庫驛

依反雅次墓

窟山城趾

佐見山

那波山祥社

石ノ森
 唐猫舌
 紫崎
 花畑清水
 城那澤元塚
 亀ノ山

節東慶飾

播磨名所巡覽圖會卷之四

御着驛

河津村と云若花山は古書山河津の附家と河津田との一説は後醍醐帝遷幸の附
 乃河津と云つた又河津宮后の宮と云ふは河津村邊と南条の間にありしなり

御着右城

河津村と云若花山は古書山河津の附家と河津田との一説は後醍醐帝遷幸の附
 乃河津と云つた又河津宮后の宮と云ふは河津村邊と南条の間にありしなり

牛堂山園分寺

三井庄園分寺村あり 仁十五代聖武天皇十一年詔
 十町を給ひ尼寺は水田十町僧寺は尼二十町としめ寺の名と

て園毎又園分寺と建ると云

續日本紀曰每園の僧寺封又十戸水田
 十町を給ひ尼寺は水田十町僧寺は尼二十町としめ寺の名と

令光明曰天王護國寺といふ尼寺を号て法華賦羅の寺と云ふ
又云

寺祀曰南大門より奥院まで約南に二里余東院西院乃同東西六十余町あり
 南大門の北半より二十町下の三井乃二階半と云是之本寺の東院阿彌陀大日山乃物是之西院市寺

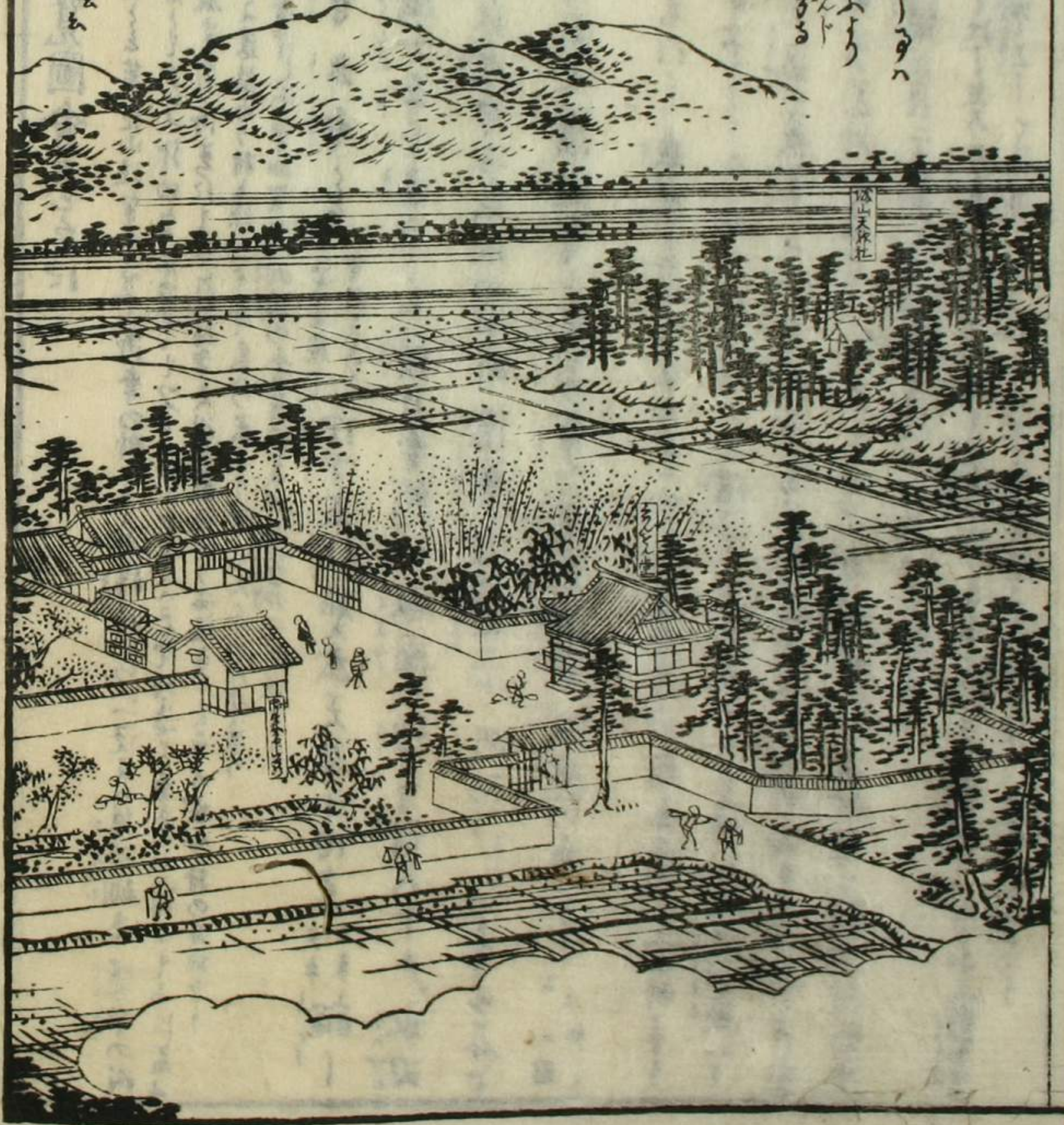
奥院の八重田の長きうて本寺親善本院阿彌陀大日山乃物是之西院市寺
 ありて本寺の善所如來なり本寺本寺の善所佛之釈迦阿彌陀

十二面大威徳日月二天十二神ぬ入寺内七佛の善所あり

しりいかくれた乃大寺とて寺上の後と造堂あり寺中妙日菩薩一尊あり又別名
 の寺如と云ふとて其後一寺とて建今の寺の地は大威徳の跡りなり其寺

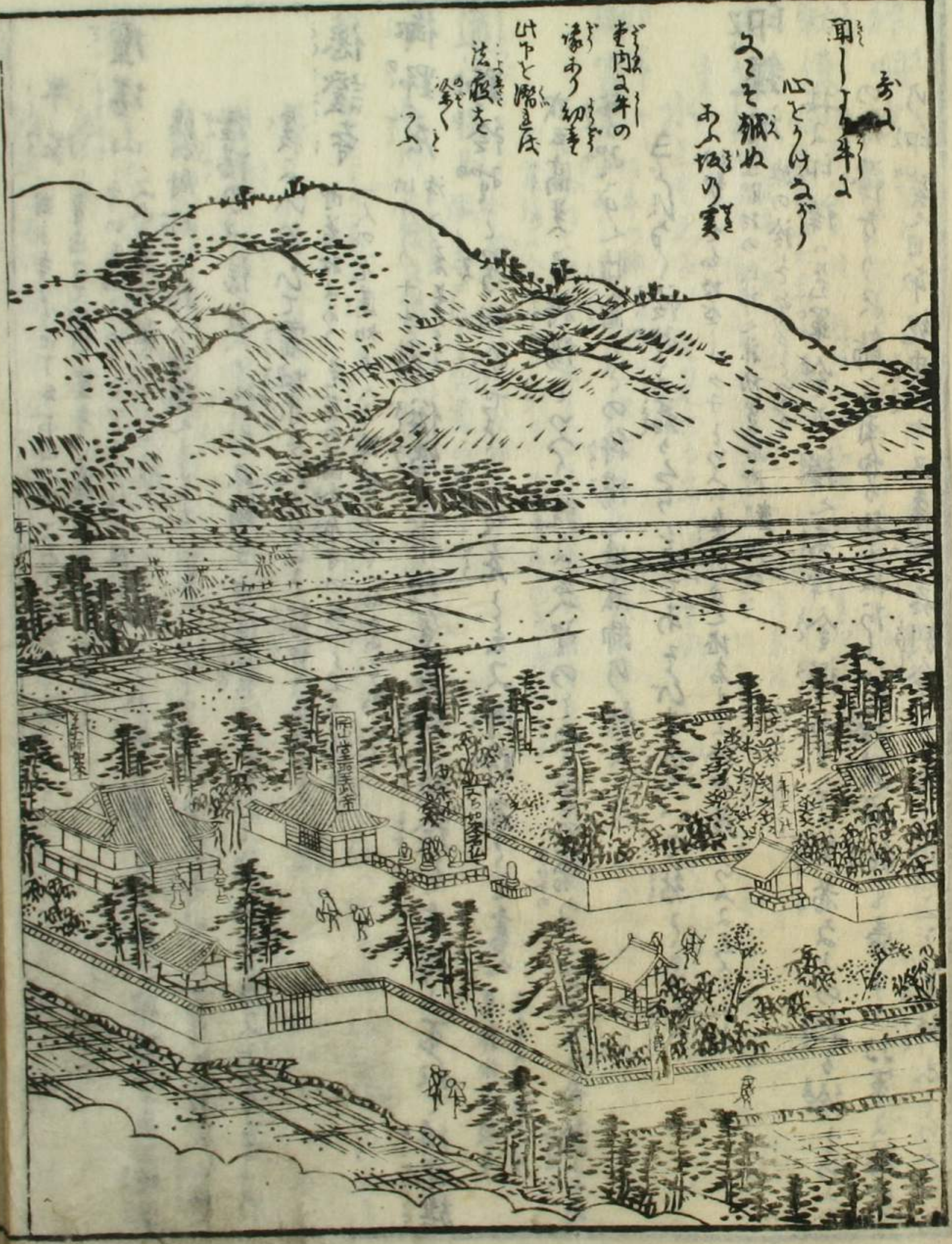
國分寺

牛乳を以て号けしるハ
寺の東の山を以て
聖年行々此國を
造堂の時大なる材
本とてとまふけ
牛乳と名けしる
寺池に月を以て
名相法園寺牛
の塔乃故の
日ト榮花也
かろ家の月の
巻、園寺牛佛の
伽藍佛の化現之
として人々
集りぬ
うららま

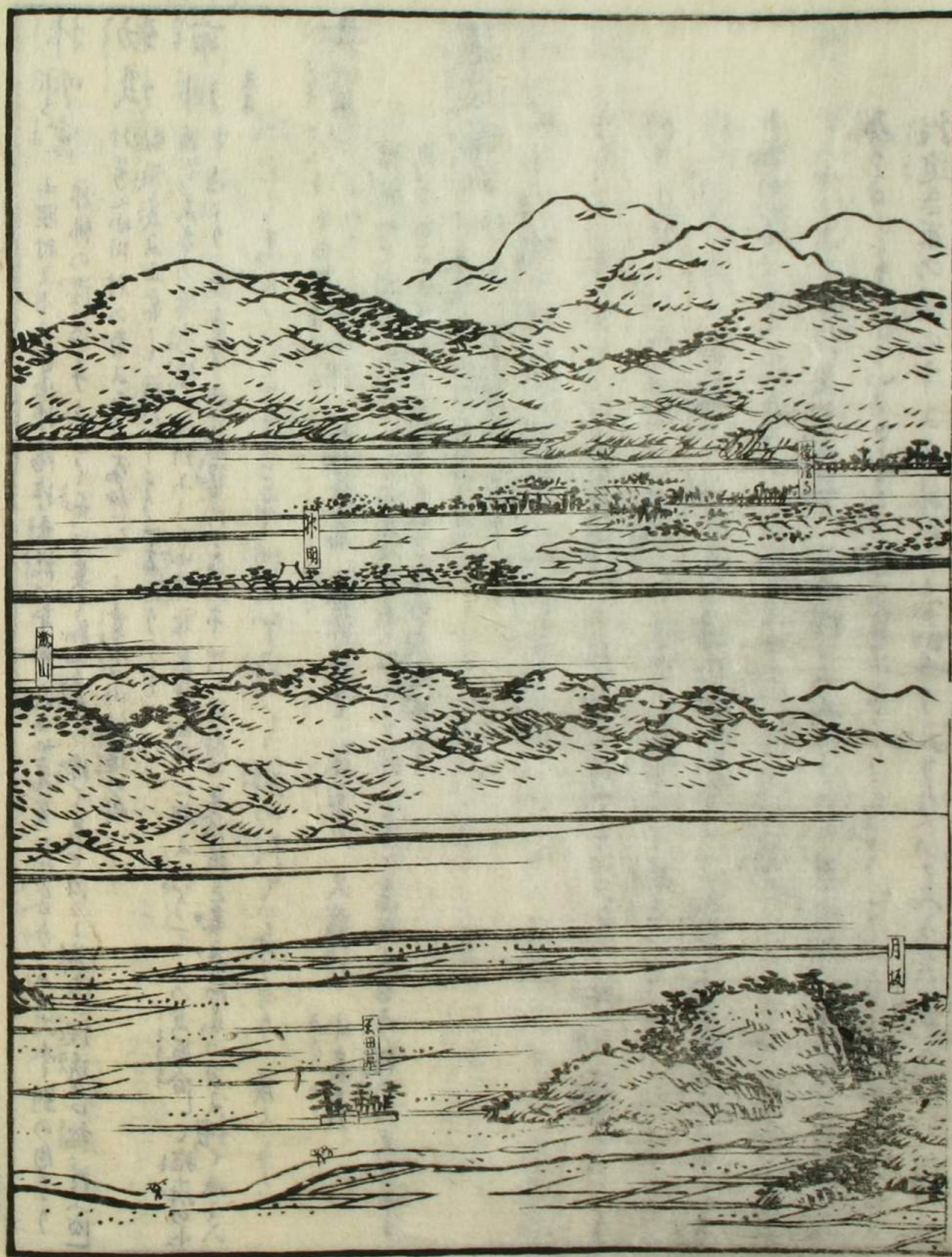
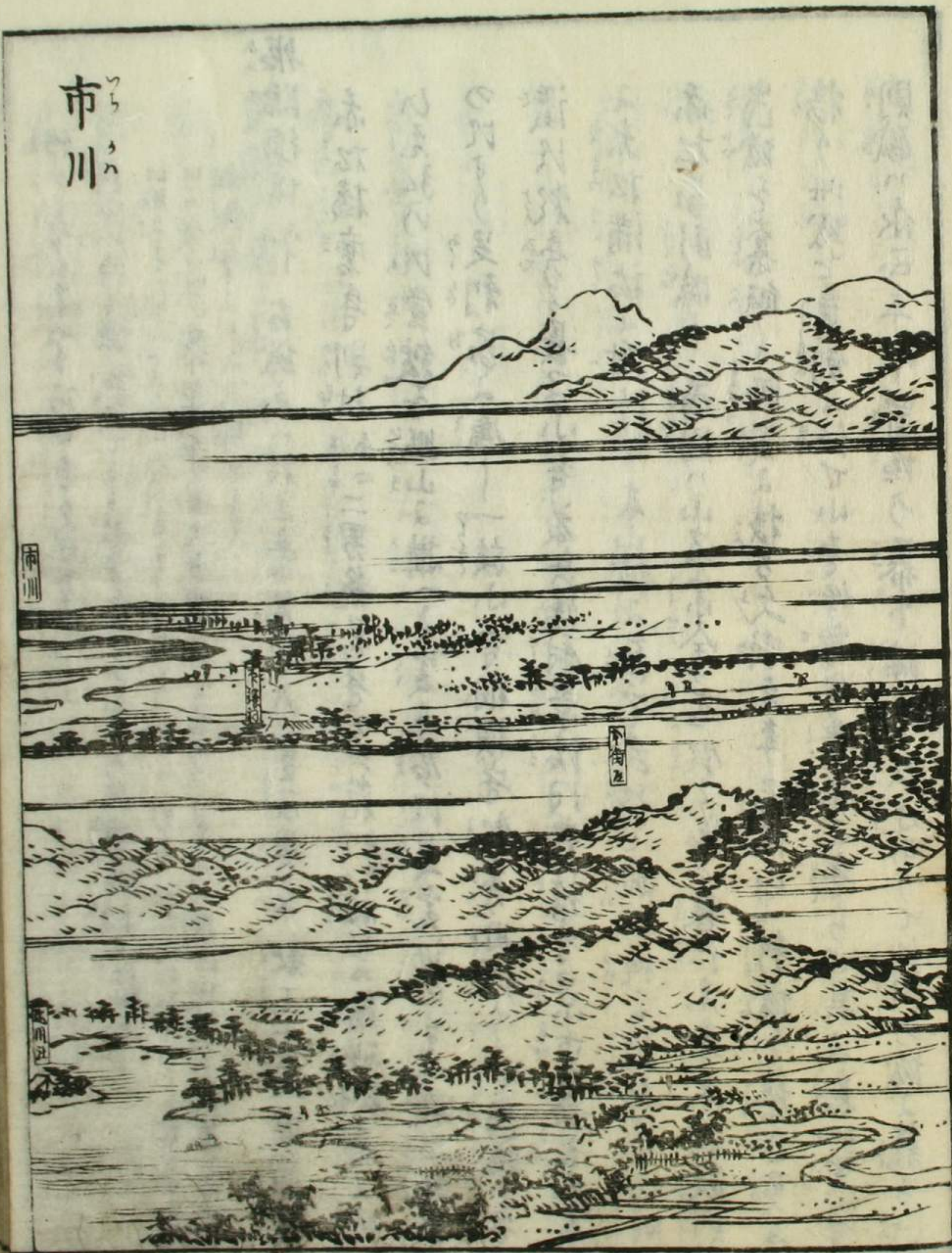


心とくけさる
久こそ瓶ぬ
あふぬりま

新内二平の
あふぬりま
けんと階と床
法座を
金く
ふ



市川



竹とろんやうらふかろふかろふ

はく入きく水代りこくれきくむしをうつは聖の河にこ

川に今いれは城下の町津谷長町と入るりりり川の堰に治ことと道はのり
尚飾摩寺よりあり併せり

姫路鎮城姫山あり右城より村と帝身七乃皇子具平親王十五世の苗裔

赤松播磨守則村赤松二男統元守貞赤松範赤松ゆめ後醍醐帝は後

い元弘の以營彼を姫山と構へて安ん居る是安徳の之の殿后建武

の以より足利家と属し一族小寺相模守頼秀目代して尚城と守

護以頼秀の長子小寺友兵衛耐景治は豊後守景重嘉吉元年

又赤松満祐は附陸し本山城を移り武功と旂し終に討死しこの時

赤松家討滅し尚國の山名宗全が不承りぬる應仁元年赤松政則

尚城を棄飯し迺安し後ろ文明元年赤松山と新城を築き足元

移り此城と舊制に任せ小寺修賢守豊城と守らせ其子息加賀守

則城に永心奉中置陸り幕下浦上が致送ありて他州の城を籠るは

附則城の討手を蒙り他州に報き合致し款陣の計略も隔りて終り

討死し嫡子英濃守鐵隆尚城護る次小寺官兵衛孝隆守護り天正

五年に到り鐵回信長云天下の附尚國と秀吉み賜ふ三本別所と

殲して後此城を移り治し日八年に英城を隔り日九年に毛利が

出城周州鳥取城と移しけ姫山に三重の殿と築き日十年に

日二日明智日向守光秀信長を頼り依り尚城に羽柴小市郎秀

長も護りし上洛あり光秀と滅し日十三年天下統一統創業者あり

秀の長和州に移りて大和入納言に任じ尚城に本下肥後守家定

守しめ日右衛門佐晴忠城番とあり期て秀吉云に日海を係定し

武威異國及び改姓豊臣と号し関白を歴るを岡と昇進終る

依り日中乃諸候領地と改改らる慶長元年池田が輝政も尚

國と編り播磨淡三州の大守とすは附所地也とす
百方石城編り姫山の林麓に三村を不備

宍村中村國府寺村是之輝政入府の後け三村と都て姫地と号し

城と



惣社伊和大明神
 非儀十一軒
 内殿若坊
 巫女一坊
 外
 九軒
 佐階の
 社家

正一位刑部大明神 姫濱宮 系神二夜深秘乃神より傳て八天堂と号す

池田輝政の存靈神 濃州刑部村大己美命と号す 後以て久し別處

般若院神を馬場氏所供所長源寺

或曰世信は神を老瓶と号して好睡をおぼりて是と号す 乃ち今も其
堪より奉草綱目は瓶百歳と云れり 此の事と云れり 以て人々
多奉の老瓶纏結と号して人の眼をみたり 是れを以て書し 習俗の
つせと集解は美(一)のこを例を見たり 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

血屋敷 刑部 延喜式に刑部省とありてとく 兼と礼との被不とあり 二は二朝羅王
御紀の所の神室の中小刀出石 濃州の御政大守とあり 時後して是は
け世信の史の記の記して書して人々の物と云れり 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

梅雨松 姫濱宮 延喜式に梅雨松とあり 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

月園 上野澤 今上野澤と名のる家あり 是は沢の極

所名

日月洞 竹の門の外にあり 今小室と云る 或曰弁天と云るもの 是女祭と云る所なり

雄山 長久山 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

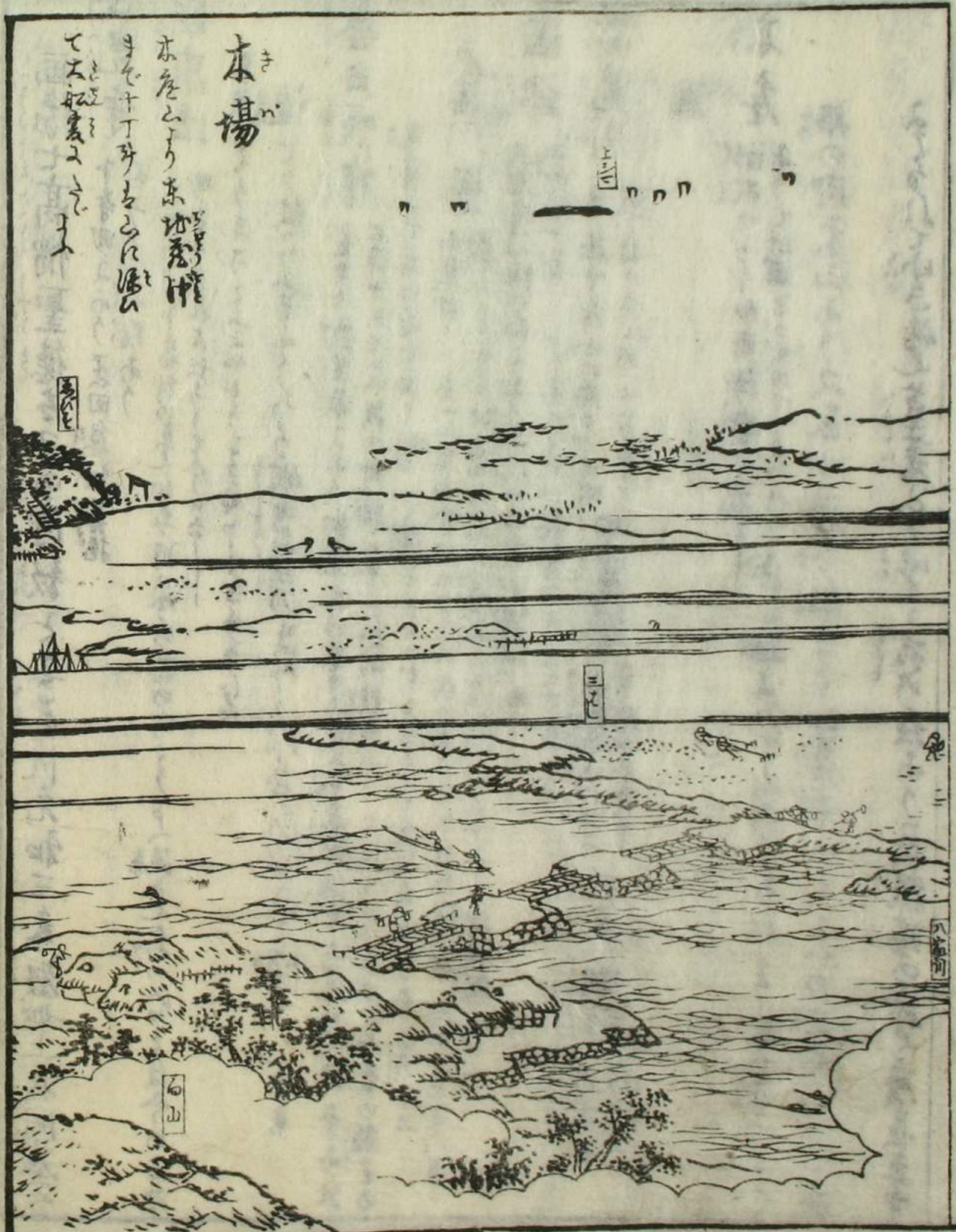
應神帝 玉依 人皇七代 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

大歳社 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

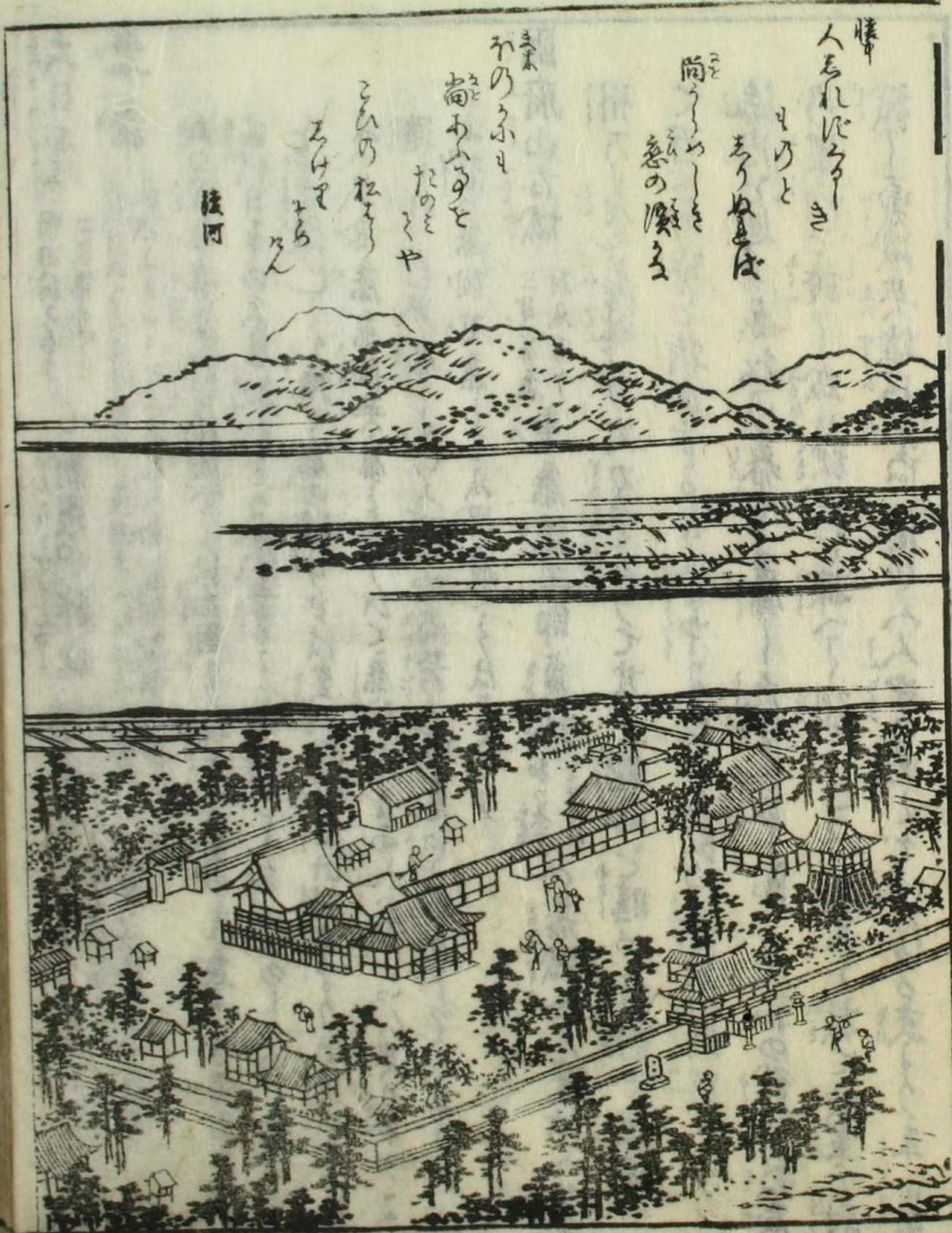
慈恩寺 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

後園長者宅地 二階州あり 今人の
居位あり 中津藩あり 傾城淵 園の南あり 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや

姫濱寺 姫濱山神名寺と云る 乃ち此何を歎歎のたぐひと
いふべし 乃ちらんや



本場
 本居より東に
 十丁あり
 大坂より
 西に



大日本 明田村あり 新羅明神社 明田村あり 兵國の旨と
妻 妻麻 兼田村のりあり 佐修よは村号の丹の二麻出り 妻麻の地より丹麻
或日丹麻妻麻の義信にべう 凡九國号村号又其の空麻の家乃付相後
右代日本の大空相いりる 飯名書りて空書りて空のりるのりるに麻乃空
を書きししとて強て麻の故より空は定めりし 若し村号より此迄の空を法
みりて妻麻麻同英麻とらりて麻同の中よりあれは同とらる英の書りて
通しれは男麻ともいふべきや尚考ふ也 此は又苗麻ともいふありて
み皆の麻同英麻ともいふ國府之とははるなり

國府山古城 三村妻麻 妻麻孫三郎貞祐 の居城之元来け人九
州の産之若冠より大カをありて其上輪略と略め兵制と振練
て百万の勢と指麾とらりて中より元弘の以武者修好として
海内と巡り赤松乃幕下屬し九牙の長とあり文和の戦い其後
乃軍功と旌し或は兵と捕へり磔とし又大本と扱て敵軍と討
戮し勇威英雄は教はし討の人人中の虎とを呼ばるなり 幸田系

て天正八年乃以の小寺官兵衛の居城とありけ人ノ宇長源氏乃後
胤是田判官信者身 高滿が末孫下野守重隆當國多可郡止所
嫡男官兵衛尉の娘治乃城より濃守鐵隆の養子とあり 娘治とあり
天正五年羽柴秀吉云當國入孫以し 時播磨陣とて其の懇志を
運びたる其後別不長治と國我も小寺官兵衛の三本城の案内者と
し 忠貞教度及び不長治就て後秀吉云三本城に移りぬ小寺曰
け地要害堅固の石城とは中せとも 山嶽田ありて偏僻の地とあり
山城の川重山嶽とに南より海あり 弘の自中兵衛の運送心の修之
是乃師の居不之秀吉云これに諾して娘城に移りぬ小寺は國府
山之居城構へ教度の勤功を旌し 孫三郎の墓ハ山の麓の田の中より

黒田氏墓 國府山の麓あり 小寺官兵衛守鐵隆の石塔
妻麻川邊 市川の下流に 速川河 川西河邊あり
飾磨津 飾磨市 古妻は麻同 古人の倭りて古歌よめり 元若の飾磨

津田細江 津田と細江との間の川を是郡界と云ふ。後世よりして二村の名と

後言 津田の細江を是郡界と云ふ。後世よりして二村の名と

又月雨の津田乃細江のまづし月久ぬも津田乃細江の浦うらぬ

津田徳蔵 津田の宮の山三丁斗より夏三休も生原の三休蔵とも云仁治二年七月始

宅倉村 龜山の中より推古帝十八年毎國又宅倉を是の日向守能より云

ことひのまけの酒はじむり藤原の傍よふぬりの

山 小山より廣峯の

若一皇子權現 長谷山觀音 八重畑村より

銅山古坑 八重畑村より

早田若清水 水室より

灰山城趾 園心の二男藤原守貞能子息能赤松貞村山名宗令の居原守に即

白圃大明神 園村より

洋方より 延喜寺津名嶽白圃神社

より齋跡之と市竹人皆云く此或説又用化天皇第一の姫宮との云

加茂大明神の餘流ともや鳥羽院乃御宇又安濃川又御宇あり

飾西郡國郡在自圃村の社の廣嶽山社官相傳は曰自圃新羅より若廣嶽牛取天皇

石室 廣嶽山社自圃村より

高松寺 白圃村より

國彈心九清門乃致して寄附物多し

長者屋敷 白圃村の田中小さき森あり

龜舟寺跡 同村より山陰中知言

太子堂 日不念佛の土より

風籬堂 義塚あり

具乃り 叢 菅藤本株 笠 石古法漢 杖 三尺五 袈裟袋 一名居士袈裟袋より 妙現 一名長

豊國 聖徳太子

風 蘿 堂

増井山持森



碩谷三寸三ア 幻囊 藤本本條 抑風蘿堂ハ瑞位天名山乃持藤はして年
 中を寸三カ 慶石より百歩をくり上りたる谷にあり其側を之れハ老松本林と
 して種乃多幽みきく入本草茂り洞水に方又流る後ハ廣嶺の社
 改書寫山乃山寺連り若少は極慶没飾慶完各師浦津の中川
 々々け島淡路島根ハ本の向くく又つりり老又市川右又味寄川
 壁少は客乃西園と淋くも成た乃しし一室又竹ゆりと長
 安名利の塵と離るる

芭蕉翁筆 芭蕉翁ハ伊州の齋少て上野反堂を以て仕
 て松尾甚七郎と号し壮年乃以官と辭して江府深川芭蕉翁又
 止修一名と桃李と改め専俳諧正風神を以て世に鳴る元禄二年
 弥生の末奥羽と幻柳ハ加賀國又入北越がりく小幡藤して飛若の
 方へくゆる附綾別ニ菅筆又己が後々と流て飛又貳る
 卯辰集 白露路もまどろく 叢乃竹湧く那 北越

廣峯牛取天王社

平井村上方あり

系神素盞烏尊

天照神

三入神八王子掛社

白幣社

軍殿

命

地養祠

天社

又河濱王所冠若殿九部の神完多之出社の御法座ハ聖武帝天

平五年三月十八日吉備云降朝の附け地及於て素盞烏尊乃神

詔を蒙り系神又遷て上奏し勅を奉り六月六年又神社と造營

以其後因融院天祿三年西峯より廣峯又遷りあり願后貞觀

十一年山城國又遷り

授播磨國五位連素盞烏神後五位下○峯相記洛の祇園遷

ととつり

廣峯古城

の苗裔爾として廣峯用關りの神職之常と武勇と勵む兵術と好

て建武の乱又是利又属り系合戦又教度の勲功と旌り將軍家の感

快と賜り割り廣峯廳職を蒙り家門繁榮して内は社置又於

て國家活平武運長久と祈り外は村御と業として軍法ハ陣且精

心と凝り其に社務職と兼帯以因茲一山乃は人兵と揮ひ國戰

の勢いをおり以文明の以赤松が委陸城と總て附新海不とあり天文

永祿の以中國大に乱とて赤松が一族も國郡と争ひ神西永良協合戦

に廣峯新に即是後乃後俊又死り永良協を守り新に即是功之後

て款を退け赤松家の感快と賜る今又傳承せり

白幣山

甲山神社

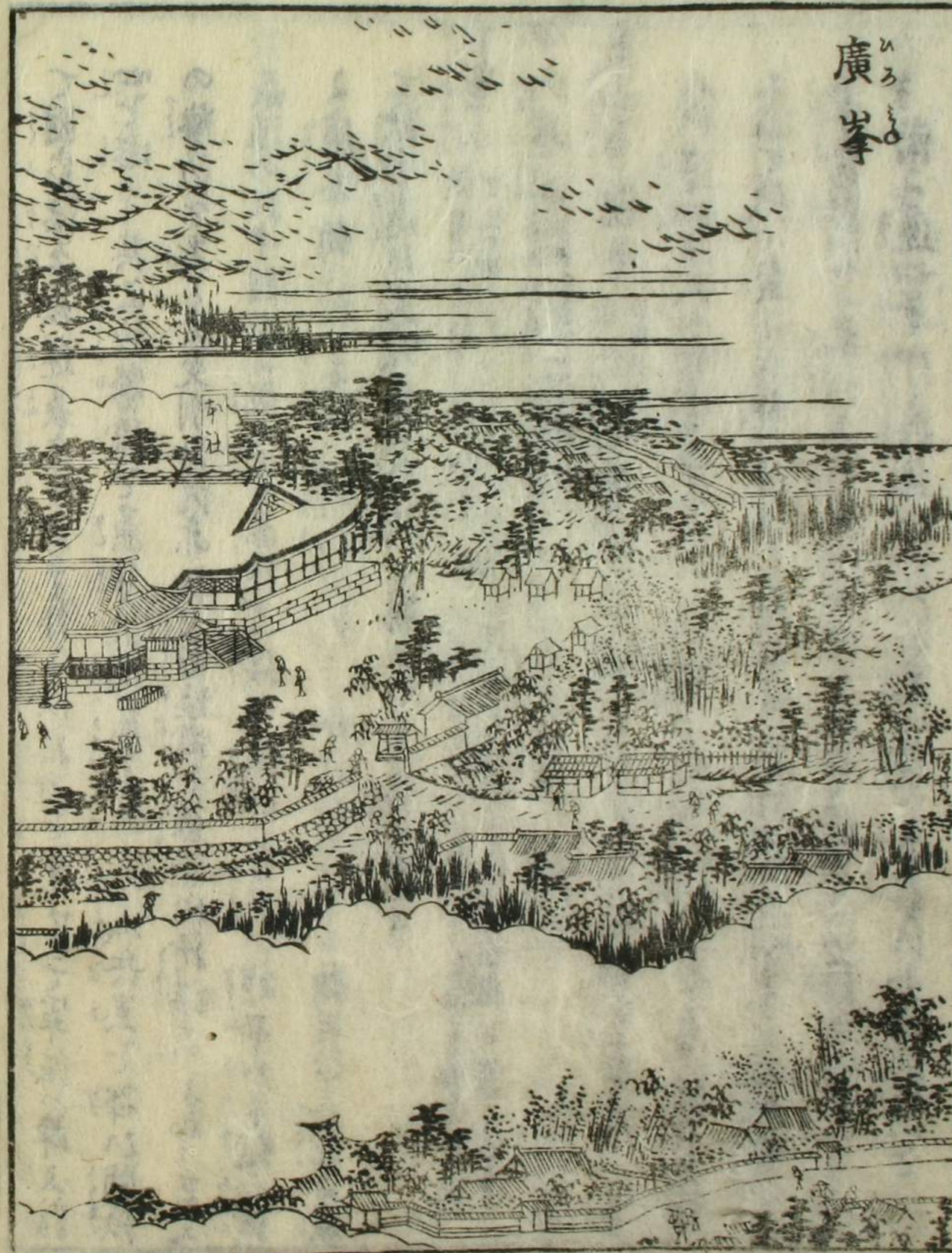
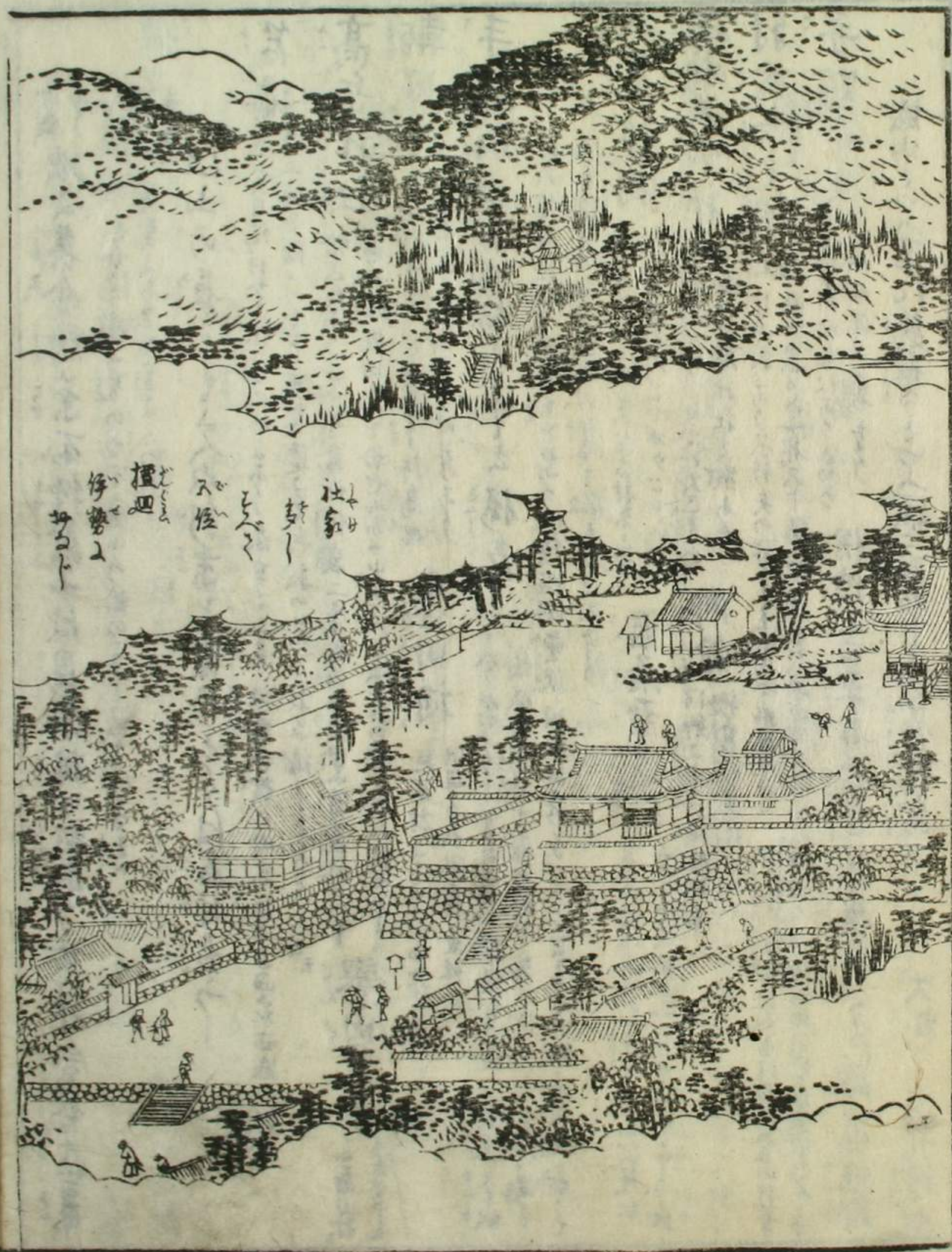
龜山寺德寺

八代蓮如上人之實玄上人を以て後職とて

を以て代り安又止職とせしむ奉る阿弥陀如來

聖人の教右又若僧上人の像餘間には聖徳太子の影十字名号

南又蓮如中真蓮如上人自畫の像と安曇氏小又神拜堂



御次又集會所茶不經花子は貝奈林の歌あり其外堂舎住業
なり 今寺院の後又歌の石龜山の歌のうらうらけ寺元
寺元 英知ふありてをさうらけ

け山の長くも又ぬ幼末と龜のうらうらは名付並う

官編 英知日記曰く徳寺の西あり永亨十三年結城合戦の時赤松并山内家西海の利史
の上流を防くも英知造て兵社の名と教文編一ありと云

高岳神社 恰らたのちのち神意仁併家二帝之内の後崇道盡天
奉代神孫田光と合せ祭る崇道の後崇道の神合人親王なり 譽田明神 本宿野村

鞆田祠 安田村ありを神神神島
此田若宮若宮祭の地あり 奉田祠 安田村ありを神神神島

手柄山 一名三輪山と云 揚多し 今宿より十丁南之橋越平如く草みり水
山内屋社あり云已まをあるは傍堀淵堂派神板地ありと云遊年名被治氏重居りて

八荒神祠 今荒廢して空法村あり 御館 日御あり後醍醐
小祠あり云人シヤカサジといふ 御所清水 日御あり日帝書山形奉

三和大明神 三輪村ありを神神神島
本宿山三輪神社と祭あり 御館 日御あり後醍醐

村楠兵主神社 此村ありを神神神島
合せあるを神神神島 御所清水 日御あり日帝書山形奉

手野乃里 書字川の東ありを神神神島
山内山湯乃野あり 俗傳又曰平井保昌攝摩守りし時攝摩郡

城山と云ふに徳意と云ふ城三百九十人の属後發りまひ大徳と云ふ神神

所名

夢花川 一名書山川兵栗郡の中より流れて書字川の西と云ふ書字川の東と流て
英知屋より海へ入又一流の書字山のの中より流れて書字川と云ふ

うつろはさていふは攝摩の書花川の流れていふ

まらしていぬるといふはまらしていぬるといふはまらしていぬるといふ

書乃夜の後と云ふ川を漕ぎていふは書乃夜の後と云ふ川を漕ぎていふ

所名

青山 山内道の諸方より八雲御抄に書花川と云ふ
入村中よりありてと云ふと小丸と云ふ

まらしていぬるといふはまらしていぬるといふはまらしていぬるといふ

御井隈 書山の西ありて 書山乃村中の小丸小丸と云ふと書字川の東と流て

人丈石の小磨と云ふカ草の者なりが暴虐肆は路中の通好は

又高松の財と奪い王化は降いり小門を築き小野原大樹と造して小麻呂の宅と號其時史中より白粉花かて大樹とよびて退ひたるを大馬のこし大樹津とよむせり口と接てこれを斬りて小麻呂の破規す

青山河 今細川 稻園 まらけあり柿本丸極摩寺より 淡陰澤 秋書潤

妻見園 妻山 稻園社 妻山よりあり柿本丸極摩寺より

飾西澤 まらけのゆゑあり

美寺村古長泰武継事 聖徳太子の依奉し西州より余部の庄を

の月又先で我と志を管て決しうの衆家云これを感じては播磨(う)に美寺の地

美寺薬師 飾西村中人家の後より

聞より母より寺の先よりは極橋の志より甚しき事なり

大蔵津 飾西村 實法寺 管生庄今の 一宮神社 美法寺村中より

法傳寺 余部の庄藤田村より建礼門院の本願寺

(瀬)

網敷天神 津田村よりあり美津西近の町時家より取らるし移り殿を創て其上より息懸り

加茂祠 加茂村 天満宮 英賀村よりあり傍に英賀村社あり

英賀城趾 英賀庄中渡村よりあり神三本右馬路通の居跡より

白牛 高村の長が家には唯雄と音本の人天下の希物なり

箕養寺 かま西田寺英賀村より 大樹清水 英賀の南より

(山)

書寫山玉院馬場 田井村の 車寄 板中口

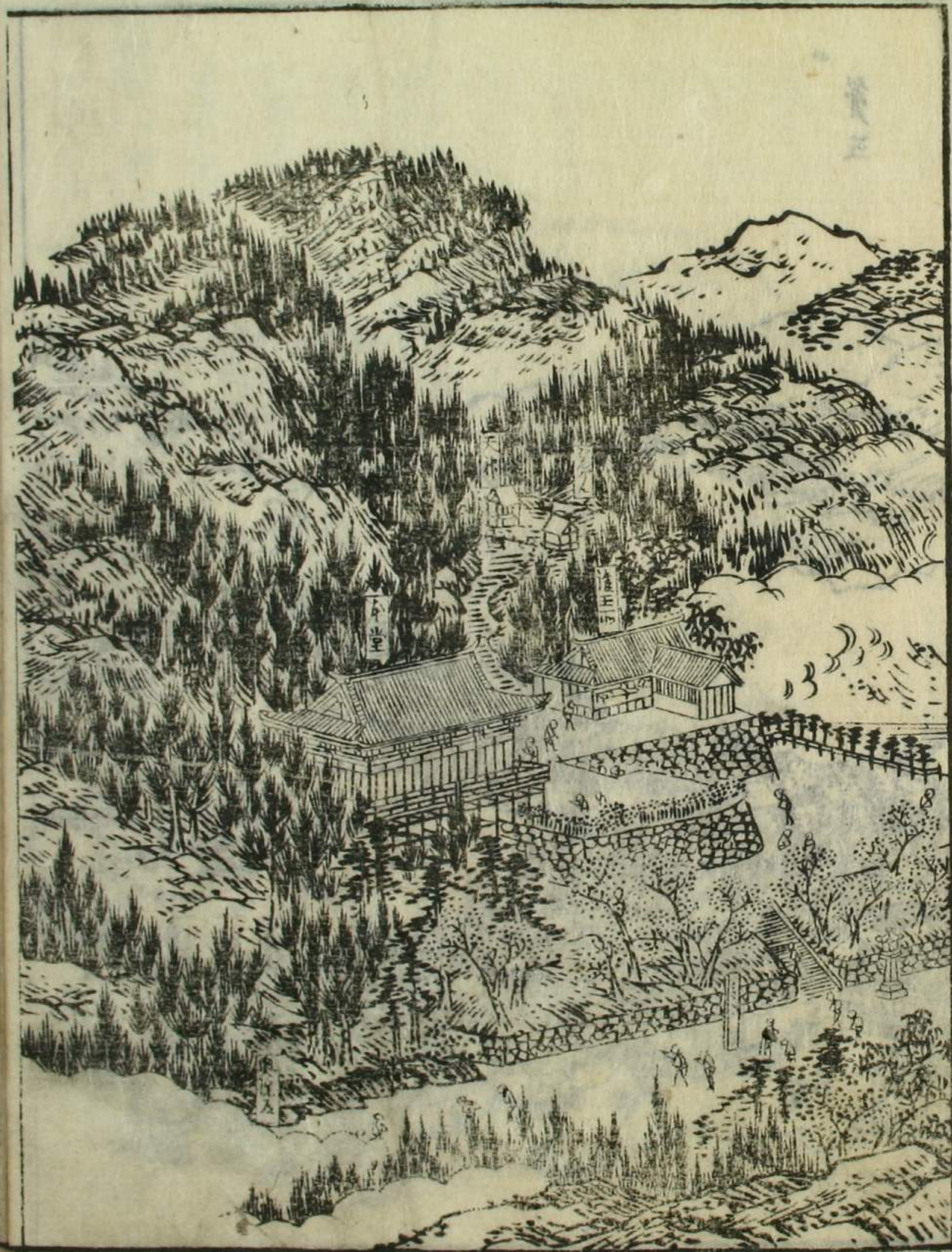
女人堂 善港山如來輪寺より 引雲園 紫雲堂

忍がし岩 其外希美字文所の硯あり地如意輪の跡あり

忍がし岩 其外希美字文所の硯あり地如意輪の跡あり

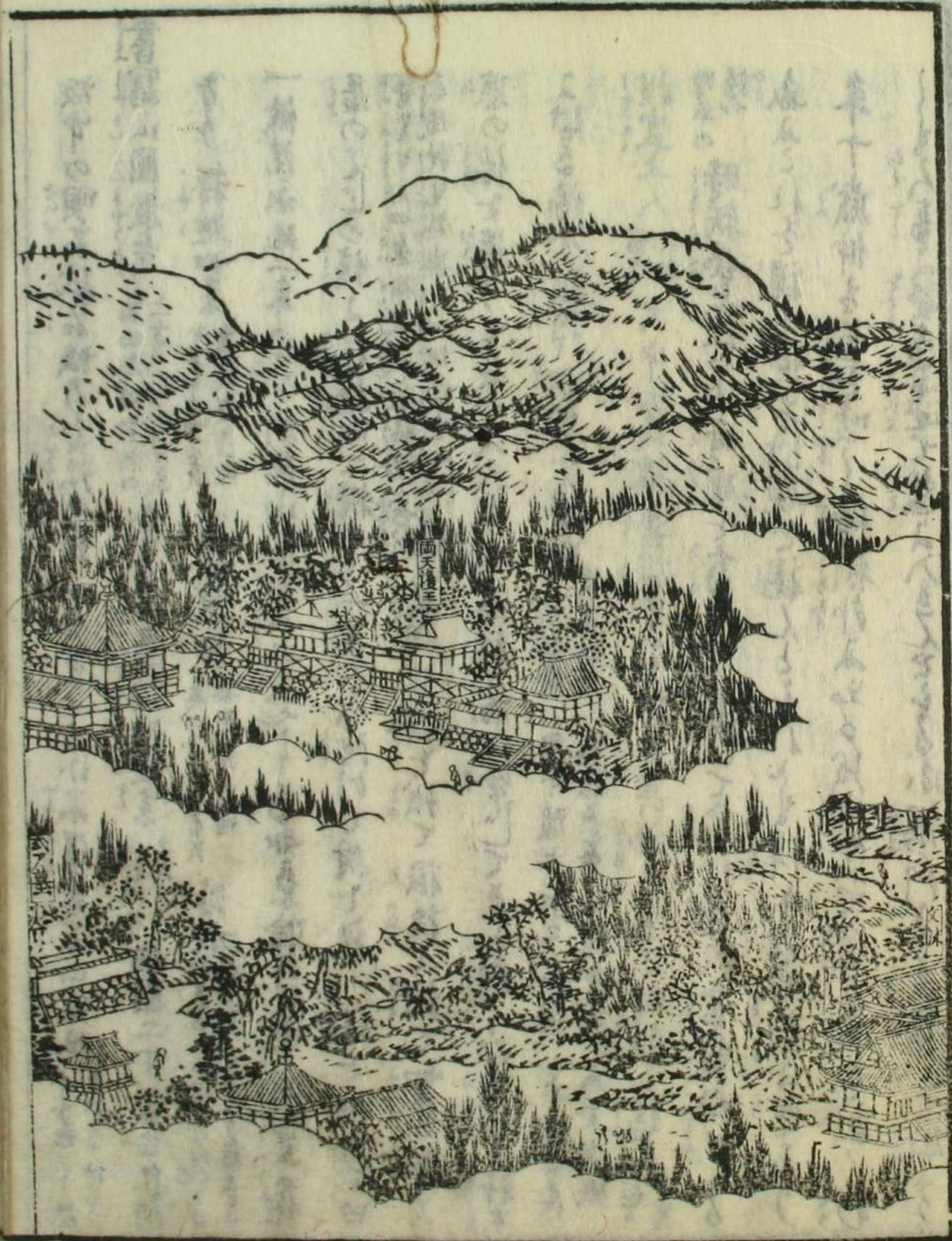
忍がし岩 其外希美字文所の硯あり地如意輪の跡あり

忍がし岩 其外希美字文所の硯あり地如意輪の跡あり

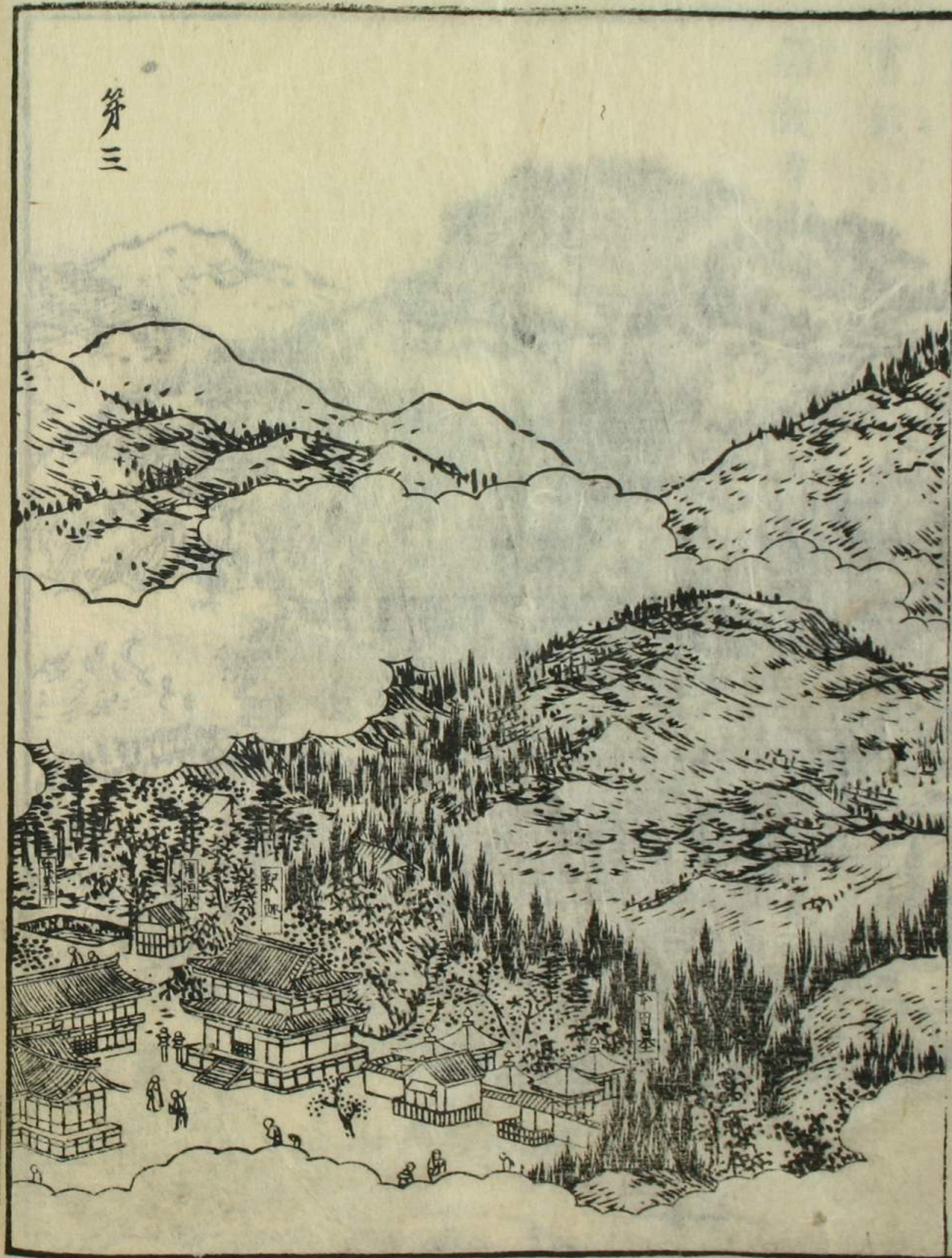


書寫山
圓教寺
第二





第三



坂中の唄石破石坂乃古法亦教くわ年をく小不違書字山傍院今廿坊三十院

書寫山圓教寺能西郡坂本村の上方あり天台宗 本有如意輪觀世音六六の像 西國二十七番札所

あり釋迦如來摩訶那の地 阿彌陀佛真のまゝの姿を其の地 清水水そのまゝの姿を其の地

一條院承延二年の草創開山の性空上人の本有如意輪の像の性空其の

居のまじり候に櫻桃の二樹あり一日天人降りて樹をれし偈を傳つて曰

善哉善哉本如意輪佛有菩薩觀音善哉善哉 宣師其技を代て根拠を絶て如意輪大

悲の像と造りて長一尺八寸安法好者よ令じて是を刻しむ元亨 釋迦

よける像今後内し収む上人頌曰美而赤顔 剛亭隱士 以之為樂 不羨富貴

性空上人俗名 仲吉 大中未攝善根の子之仲吉其神の反原時朝時朝の

時朝嘗て一つの奇觀と畜人珍寶して家に養ひ官爵拜任と

ぬみこれを視る仲吉を視んととれども許さず時朝又思あり

年十歳仲吉を咬く時朝外みゆる成定観て密に首を抜く

しも人畜の勢き遠て遂に入らんととる小深川に流して破る

仲吉大さ小思も思量仲吉よつやう汝殺るくううととてこれを

伝る時朝大に怒りて曰此觀の鼻祖鎌足連後吉の弟は授り多し

代り傳へて吾に及ぶ汝家産を破壊しる家の威を振く邪水

をく其罪輝くくはく忽ち首を切らう仲吉大に悲しきまより

慈心附又年 三十六 人乃あらう日州霧島山又房狐徳び若幼食藤と

忘れしれども常々面を微笑相あり日州み居るるに年はして流る

背振山に移り其後書字山を削き寛弘二年三月十日九十八

著聞集云法皇書字山の幸に對面の中畫工をして上人の像と

圓せむけみ山動き地震法皇怒怖 性空の曰怪むるる

我像と寫しむるを去り顔み小き態あり畫工をけりていまは是を

圓せ震動するき等と為し雲飛 應の飛く如諸人これを感

信以今又室ありあり

○寺住持山法皇上人の徳と感して寛和二年七月小仙碑とせりしてけ出は妙奉

しまし入其後長保に年三月八日きて能率の附上人の通宝山林職守はしまし
 法皇御よりとてふの寺へ清治の一日中遍面ありて上人の妙法を祀りて飯室の
 源巧殿に於て親して像とてつとて都に還幸し法に画所長希希とて慶賀の儀せし
 こと具乎親王深々と書以奉儀右左奉表系外成卿これを身元と即尚山とて
 上人九十三の像又安徳の者社に本像と刻て處を安徳の洞山堂とて
 ○後醍醐天皇深徳園より還幸する時攝摩國書山へ外幸ありて能率の附上人の
 深きし諸寺巡礼の次より洞山堂上人の御教堂を用とて小年以て祀りて
 を形てまゝ法華一都齒より妙なる法の振布とて燈の番の慶賀如法論の像
 戸の他の五た其外上人とての奇特と感して法に御寄附ありとて明元年五月
 日一山堂上より香古三本美の附登山

坂本城趾 金部五西 坂本村 城より赤松元宗を満祐之明德の系合我之武功
 を旌くまゝ威風熾んりて歡樂の余書厚の秘蔵に平城を築き
 是と御構へ御所とも云々け附る軍 普光院 義教 満祐が著信と悪法
 不承を没収せらるべきは満祐大に怒るに遂に源謀と企て一族と
 具へ上洛し西洞院の舞臺に於て後樂と信じて御軍と拮据し
 云家武家の見物多きと兼て工ものりり入真の中馬と放ち
 庭中と怒るに其時満祐が家臣長五郎教祐九馬女則親徐々と
 立出る軍を守護する侍とて義教を殺し首と袖と包とて良

等々指せ仰りたる暴悪を道々をりはし

水田城趾 西坂本 水田村 城より赤松元馬女則親又ハ城守則親吉元年

六月廿日日滿祐義教云を討ちて後命令して日午と離る朝録と後

川原村 左田系村 黒園明神 左田系村 信之楯鼓の束の祠

黒園天祥 日不 竹川 左田系村 根本寺 左田系村

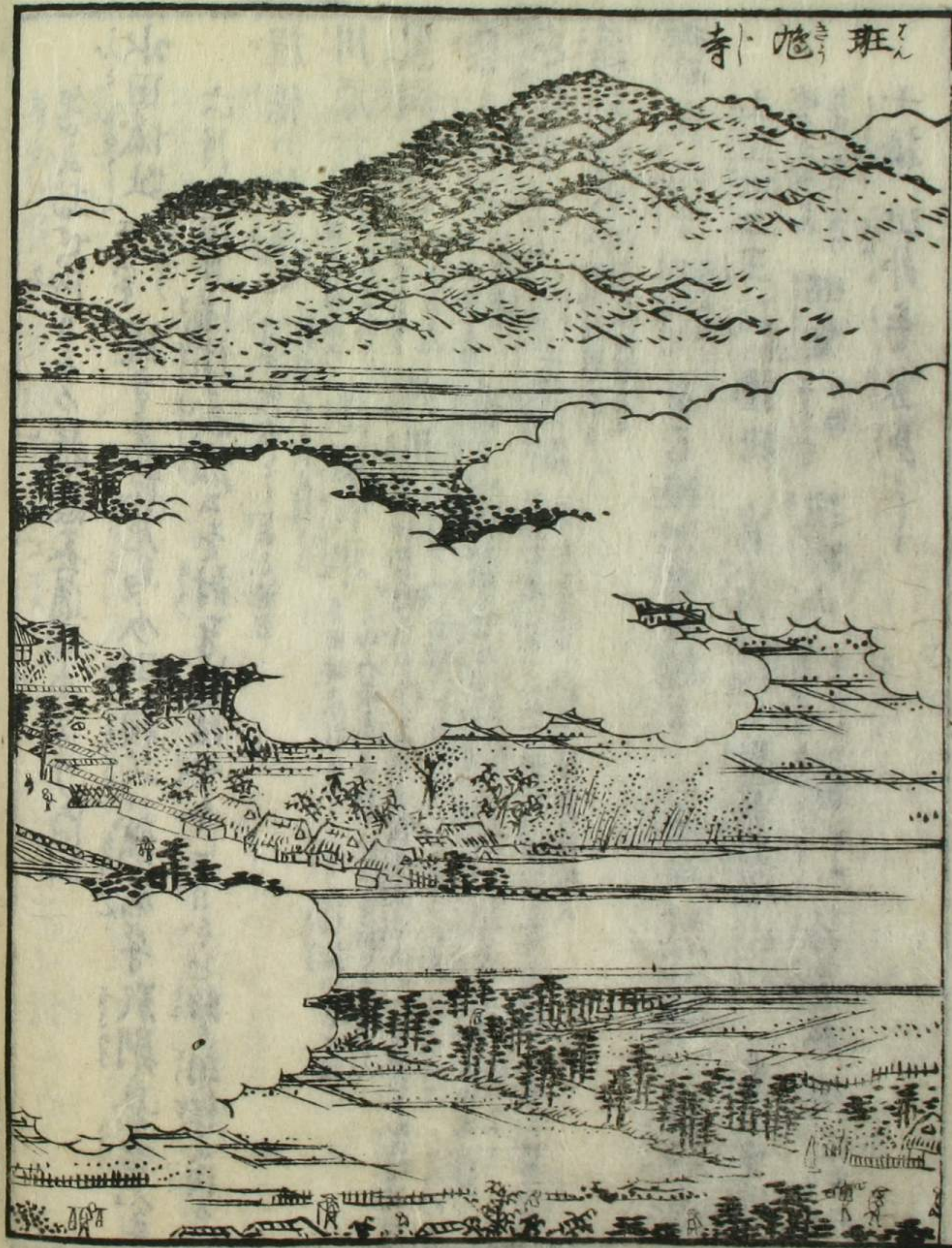
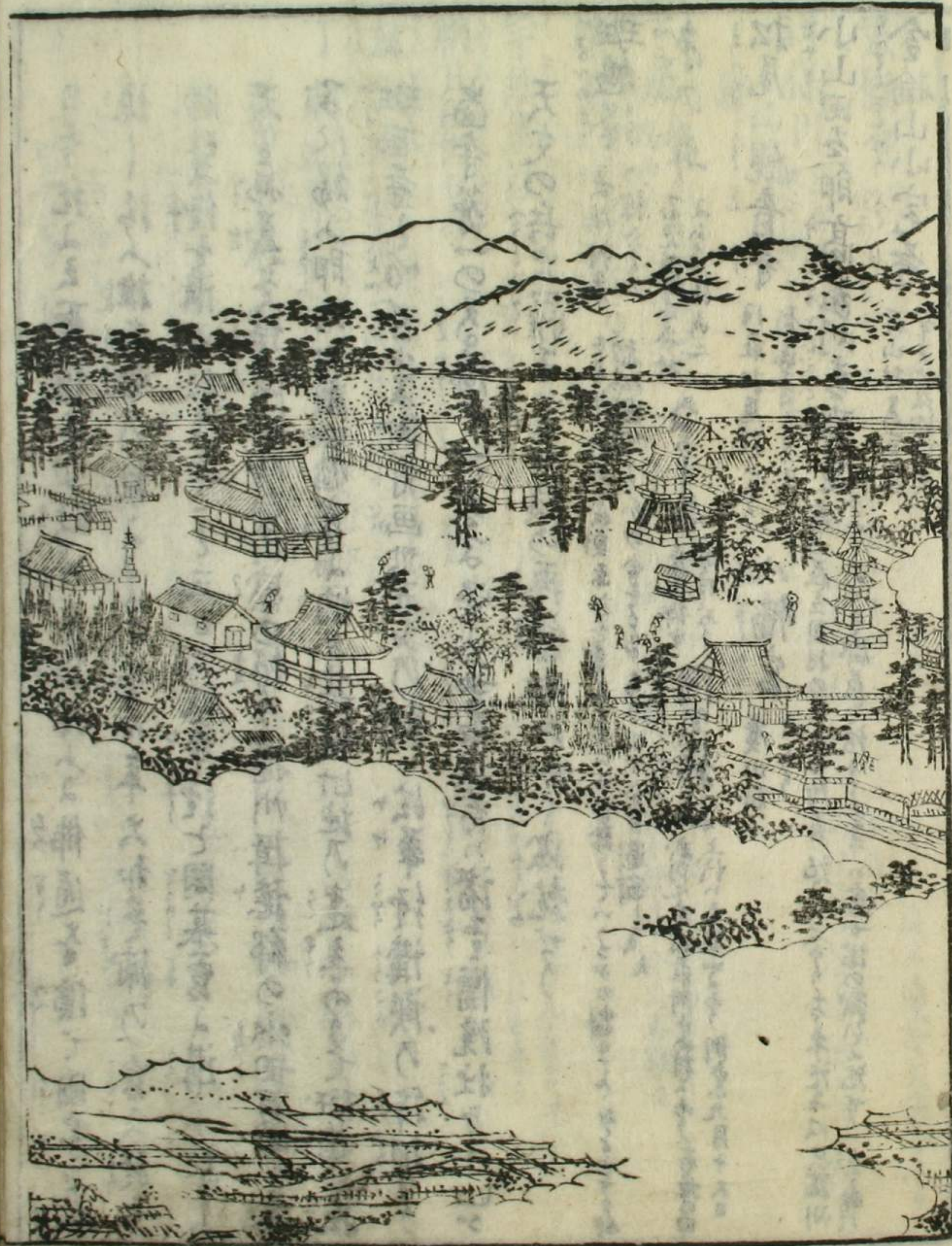
樂々天祥 左田系村 樂々山核樂寺送跡 左田系村

左回寺 左田系村 楢山城趾 左田系村

聖應山班魁寺 左田系村 本寺釋迦藥師觀音 左田系村 三層塔 左田系村 彌勒堂 左田系村

山王社二王門 禮樓 富小川の原 聖靈権現 左田系村 泰田明神 左田系村

七橋 以外寺室多し



陣屋

仲溪村楯保川川尻にあり丸龜城無の川あり

化粧坂

新庄家にあり今般重

家島

揖東郡に屬し八重河村にあり
又累代の牧也

一名河牧乃浦は島に播南の陸地を去るる

或ハ三里或ハ五里あり上は兼備より下は院家島にて東西八里

南ハ三里其間ハ大小乃島二十餘箇所都て家島に連る陸奥松島

又相似たり○家島の家と云義ハ江湾三方よりかゝりて取より

室と云は母の室も家の事之船の泊りしきを以て室と云は

つりいさるる洪濤大風よりとも船を安んずるは是より板舟と

も出せりされとも是を島をいハ千帆一附と云一附ハ教員

の群をいふて多し故に居る者多しハ渙者之滋ハ天竺の泉水

居るがと云し因縁集に繪島といハ用也云々

家島神社

家島にあり延喜式并名帳にあり

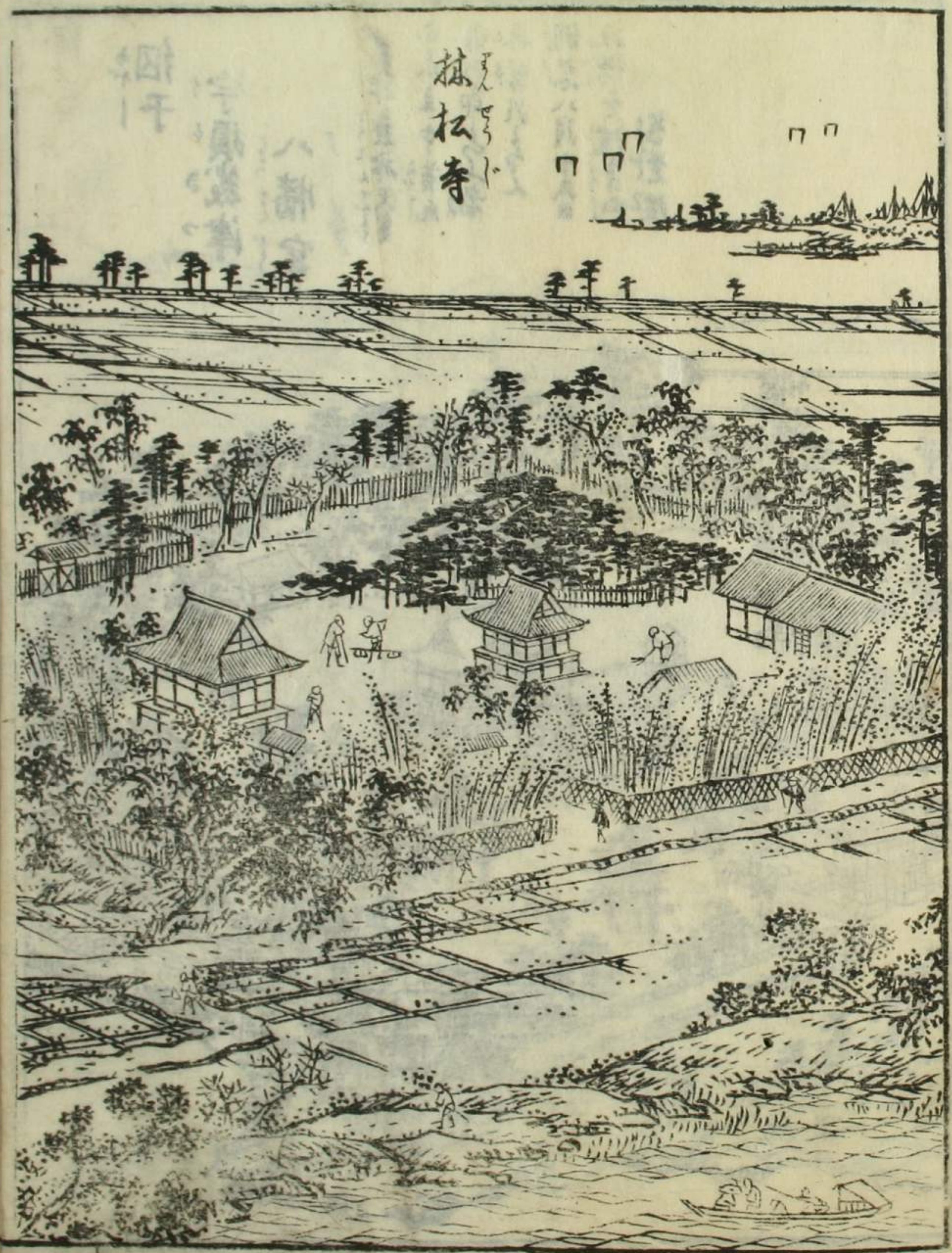
祭神猿田彦命元慶七年九月廿日

産之女人白誓大明神と稱す○天満宮

山王権現

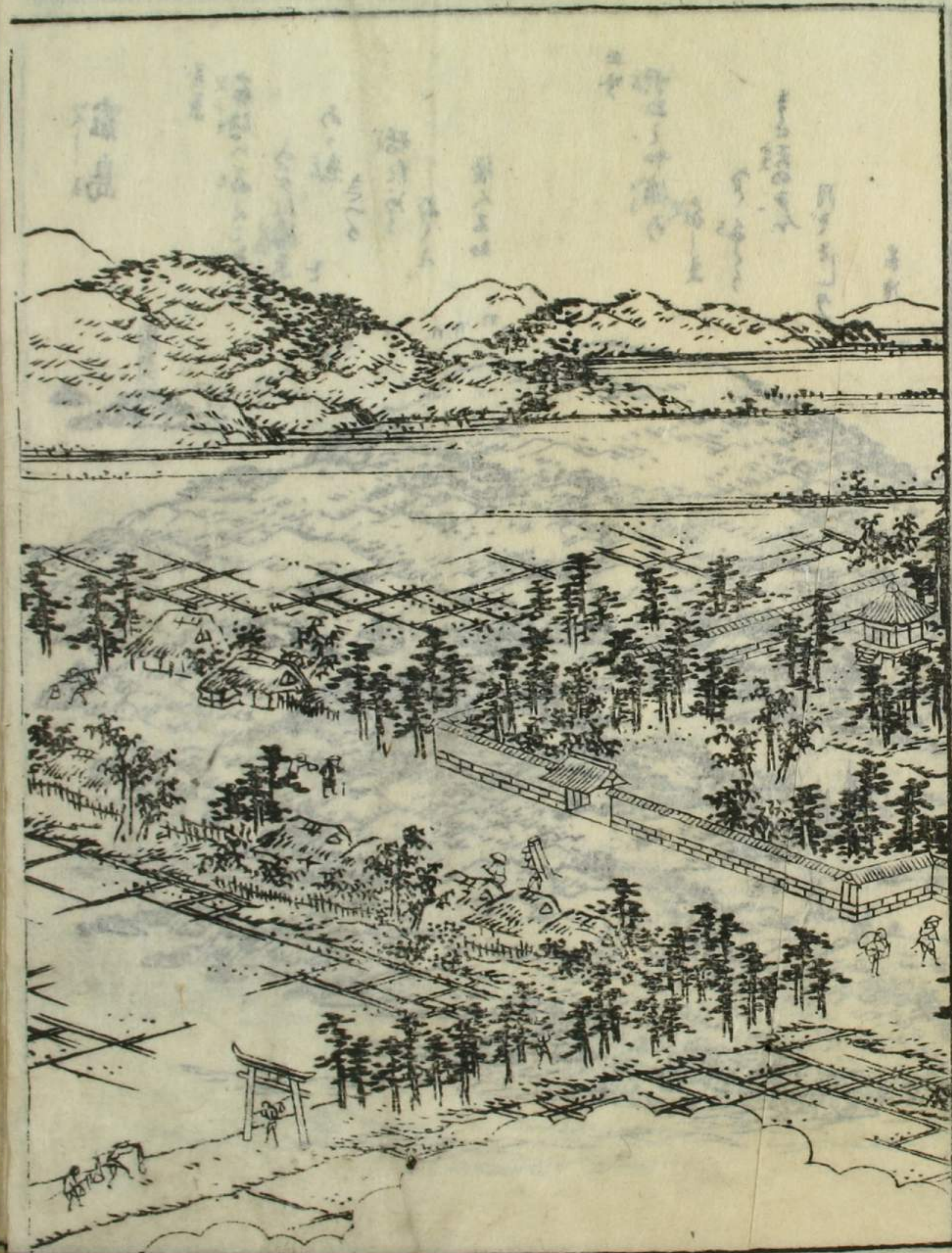
赤坂清水

家島にあり早天ハ潤は霖雨と云ハ法道仙人の秘法あり



松松寺

細行



細于
 宇須茂津
 八幡宮
 美津彦神天皇
 心水多中若丸
 跡入即とく若
 再管以とん
 例祭八月十五日
 社務を成宮山
 新覚院



楠ヶ崎

丹波崎

坊勢島

坊勢寺の送経

湯城院の御堂

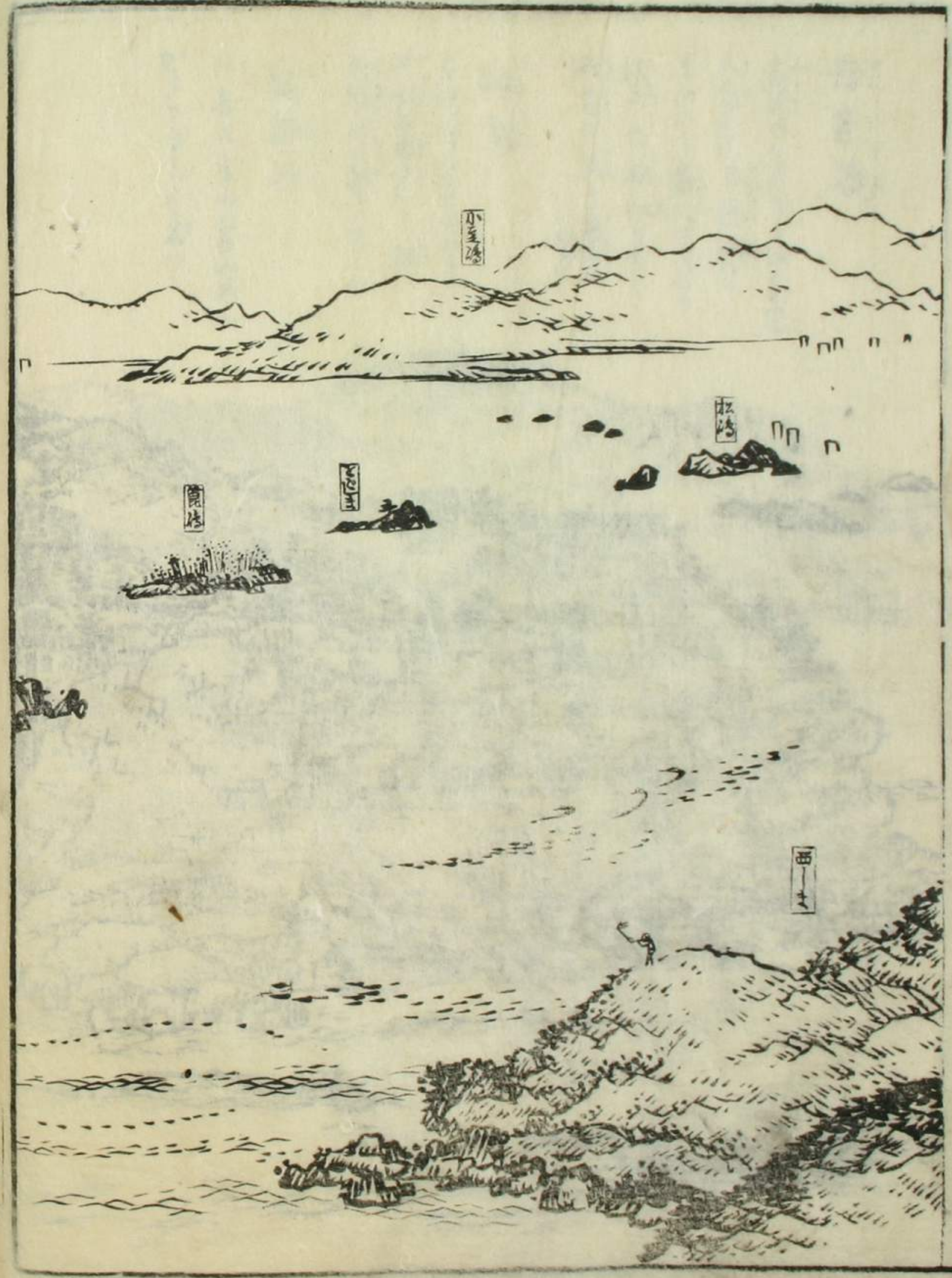
元安七身比叡山

大相院寺光徳

板崎佛岩

八尋岩

先楫西郎又居て
海中あり板屋村より
けとけり三丁あり



小笠崎

板崎

板崎

板崎

田一

観音崎 家傳あり俗に法道仙人大日寺の觀音を刻し靈本とせしむるに是なり

長井浦 家傳あり揚州より日名なり

相野 大市御相野村飾り伊保の界とせしむるなり 石鞍 鞍之何と云ふ石は昔の石に倣ふはしとて今も此の石を以て造り相野の傍なり

白鳥の岡 おじの南あり 破磐神祠 大市御西原村あり破磐石と云ふは昔に此の石を以て造り破磐神と云ふなり

凡早嶺 伊勢村の東の嶺 右路俊寛曰此峯の岩は水入六斗入一斗完と云

今登りてこれ其完はしるは凡早より水入六斗の峯つきたる岩の頂みねをいふなり其岩礪石としてに又岡高き小松の生い出

るは其完のなりやあるべしされ昔は凡早の山と云ふ尚考をし又昔をいふは凡早の山と云ふ

稻根 大市御峯相山の麓に天竺十三年九月香稻に生ずるなりと云ふは昔に此の石を以て造り稻根と云ふなり

揖保の稻穂たり印南の稻目とて赤穂系と云ふを揚州の赤穂甚上品なりと云ふ世に知るは稻と云ふ訓と云ふは日本紀伊代に見

へり又延喜式程と郡名にも書たり

峯相山鶴足寺蹟 おじ村より下伊勢村へあり 西接身一の伽藍之天心乃始らばは諸寺相殘り塔院七八坊ありなり小郷氏の塔院は燒た

峯相記と云書あり揚州園國の右路と云はして鶴足寺の僧の著

他に經隊今の中なるは大門の仏上伊勢村より大石岩 峯相山の西南の凡早の多し

大師村 延喜式に計者後藤調池田加と云ふは此地なり

大納言伴善男墓 上岡御伊勢村より巽の岡 傳曰善男御の法和天皇に仕て大納言なり 貞親八年倭國は流罪は十年配所なり

年六十其時峯相山鶴足寺中島より附りて善男なり中庸豊草菴と結ひ居し是其地なりと云ふ善男なり

秋実清繩と云五人あり宇治拾遺は善男應天門と燒る

窪山城趾 林田庄久保村より谷伏甲斐守即國成これを身より正平年中赤松政村攻め

佐見山 奥の山

那祇山神社 林田村より後内白檀の樹あり

紫南崎 鶴の形又ゆるり山之其尾崎

誠部彈尾塚 誠部庄平保村 古へ誠部細川の邑よりして冷泉家世

々の系地 今も細川より 皇太后宮女後成乃御女父の儀とて

播磨國誠部の庄よりなる人知りて其の地政乃坊げ

多く作りたり若武藏守へ是より所託はあらず

春時久し

よれ中の麻の路をかりけり心のまのよもそのこして 新勅撰

と伴後よも及びんせ一ヶ条の地政の流法と皆とらきていかり

其後建中の清水をこし

忘れぬれ心乃み白く神中の清水うげとまに 新勅撰

と依とつりも其誠部の庄へ下らとつり歌あり

奥書曰 阿佛の安加門院の系よりなる人定家郷の息ぶ家の室云達五

人の氏を教められましく後別養して其所託なりぬる鎌倉へつり

紙抄十六卷日記とあり

碧玉集曰 大納言政為 世の孫 孫生乃以播州細川村(下向)誠部

庄南社へ系りたる佐理宮とて

三坂の社 今三坂よりなる一棟あり

二尺十日此石を身まよりなる母のこし三十一歳下より作りたり

よりぬと作りたりて墓にあり思ひつけたり

うかりはる孫生の元と慕ひ来る若のつれ我や坊とん

